

## [課程-2]

### 審査の結果の要旨

氏名 市川奈央子

本研究は、本邦の看護職の質向上のための方略を考察するために、看護職者の専門職としての信念である看護職のプロフェッショナルリズムに着目し、5,739名の看護職者に横断的質問紙調査を実施した。看護職が専門職として発展していくための指標となるプロフェッショナルリズムの自己評価尺度の開発に次いで、本邦看護職者のプロフェッショナルリズムの実態把握および関連要因を検討したことにより、下記の結果を得ている。

1. 尺度原案を作成するために看護職以外の有識者からの意見を反映させるために予備調査、妥当性の検証のために横断的質問紙調査、信頼性の検証のために再テスト法を実施した。探索的因子分析、内的整合性など複数の妥当性を合わせて検討し、信頼性・妥当性が検証し、本邦で初めて使用可能な尺度を開発した。プロフェッショナルリズム尺度は【1.看護職としての社会的責任(8項目)】【2.自己研鑽(8項目)】【3.患者への専門的視線(6項目)】【4.看護職としての自律の促進(4項目)】【5.看護実践における責任(4項目)】の5つの下位尺度から構成されていた。この看護職のプロフェッショナルリズム尺度を評価指標として活用することにより看護職者に内省の促しを導き、看護職者を育成する一助になることが期待される。
2. 本邦看護職者のプロフェッショナルリズムの実態把握のため、プロフェッショナルリズム尺度全体および各下位尺度について通算臨床経験年数毎に標準化得点の平均値を算出しプロットした。プロフェッショナルリズムの尺度得点は、通算臨床経験年数が進むとともに得点が高くなる傾向があり、この変化には下位尺度各々に特徴が示された。1・2年目の看護職者は、プロフェッショナルリズム得点の著しい上昇がみられ、プロフェッショナルリズムが獲得されやすい時期であることが示された。本研究は横断的観察研究であり、個人の経年的変化を測定したデータではないという限界はあるものの、大規模な調査は過去にみられず、プロフェッショナルリズムの向上に寄与する貴重な資料になる。
3. プロフェッショナルリズムの関連要因を検討するために、通算臨床経験年数1・2年目、3-7年目、8-24年目、25年目以上の時期で4つのカテゴリーに分け、プロフェッショナルリズム尺度得点を従属変数とする階層的重回帰分析で解析した。独立変数は個人特性、職位、研修回数など個人に対して介入できる要因、看護実践環境尺度と組織風土尺度の一部の職場環境要因の3層に分けて調べている。先行研究ではプロフェッショナルリズムは臨床経験年数に関連すると指摘されていたが、本研究により、臨床経験年数以外にプ

ロフェッショナリズムに影響を与える要因が示された。さらにプロフェッショナリズムは、通算臨床経験年数の時期で関連する要因が異なっているという知見が得られた。通算臨床経験年数7年目までの看護職者のプロフェッショナリズムは職場環境要因から影響を受やすい傾向、8年目以上の看護職者では、職位や研修への参加回数など個人要因から影響を受ける傾向が示された。1-7年目の看護職者には職場環境要因を整えることが、8年目以降の看護職者には個別的な支援を整えることが、それぞれプロフェッショナリズムの更なる向上に寄与することを明らかにした。

以上、本論文は看護職のプロフェッショナリズムの自己評価尺度の開発を目標とし、尺度の確立のため信頼性・妥当性の検証を行った。次いで、尺度を用いて本邦の実態調査と関連要因の検討を行い、看護職の効果的な教育・支援策の示唆を得るために介入可能な個人要因と職場環境要因を明らかにした。看護職者のプロフェッショナリズムを育成するために重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。